

(様式)

令和5年度 学校評価 学校関係者評価書(案)

学校園名	三木市立吉川中学校
------	-----------

1 学校教育目標

すすんで学び続け 心身ともにたくましい気概を持った生徒の育成

2 本年度の重点目標

将来にわたって学び続ける姿勢を身につけさせながら、多少の困難にもひるむことなく乗り越えて行こうとする気概をもった生徒の育成。 生徒が主体となる学習活動の実践の継続。生徒の個性と能力を発揮させる教師、ワークライフバランスのとれた教師の育成。 校区小学校との連携の実践を積み上げながら、小中一貫教育について、地域・保護者への周知や理解を進める。

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	①協同的な学びの場面を取り入れた、主体的に学び合う授業づくり ②ICTを活用した個別最適な学びの場面を取り入れたわかる授業の創造	①話し合いや意見交流、学び合いの場面を多く取り入れた授業を実践している。関心意欲三者平均78% 内容理解83% ②授業者がタブレットをはじめとするICT機器を活用しての授業実践を継続している。	B	○各単元での学習内容や効果的な学びの方法等について、生徒がICTの活用場面を取り入れた授業実践を積み上げ、教員同士の情報交換や互いの授業公開を行いながらスキルアップを図る。個別最適な学びの場面を計画的・意図的に取り入れた授業実践を継続する。 ○来年度から三木市に導入されるAIドリルの効果的な活用方法の研修を行い、生徒個々の個別最適な学びにつなげ、関心意欲の向上を図る。また、AIドリルを活用して、宿題もAIドリルから出すなどしてクラウドに積み上げていきたい。
生徒指導	①開発的(予防的)生徒指導と自尊感情を高める指導の推進 ②生徒理解に基づいた組織的な不登校対応	①規範意識 学校評価96% 学校が楽しい88% 教師の声掛け88% など、日常の開発的生徒指導の取組成果が表れている。半面、相談のしやすさが72.7%は改善すべき課題である。 ②小学校と互いの情報交換が行えている。校内適応教室への職員の配置により、登校機会が増え改善傾向となった生徒もあるが、個別の対応には課題が残る。	A	○小学校との情報交換とその共有を継続し、問題行動や不登校対応について、早期に適切な対応ができるよう、今後も組織的な取組を進める。 ○生徒の活動に随行しながらより多くの目で生徒を見守り、適切な指導や支援、声掛けを継続しながら生徒・保護者との相談体制を強化する。より良い変容が見られた時にその内容を保護者と確実に共有できるようこまめな連絡を欠かさない。
特別活動	①生徒が主体的に取り組む学校行事の充実及び精選 ②地域と連携した様々な体験活動への積極的な参加	①生徒会役員が主体的に教師の力を借りずに、生徒会演技を運営できた。また、当日は体育大会大会実行委員のメンバーが自主的に運営に関わっていた。今後、小中合同運動会に向けての取組を行っている。 ②体育大会では、地域のスポーツ21との連携により、本年度は、生徒が考えた種目を共催種目としてできた。 ③教職員とともに生徒会が主体となって全校生で生活のきまりの見直しを行った。	B	○道徳・人権教育を要とした、発言のしやすい学級環境づくりを継続し、共生意識(学校評価86%)の更なる向上を図る。 ○小中の児童生徒の交流の機会を増やすとともに、中学生が良きリーダーとなり小学生を引っ張って行く機会としたい。また、体育大会では小中の生徒会・児童会が連携しあい、運営を考えさせていきたい。
道徳教育 人権教育	①発問と問い返しによる対話的な学びの授業実践の積み上げ ②合同研修をととした小中教員の授業見学及びスキルの向上	①生徒も自ら発言することに抵抗感も少なく、すすんで意見を発表し、周囲もその意見に真摯に耳を傾け、授業を通して考え方に変容が見られる場面も多くなった。 ②PTA主催の研修会を実施したり、長期休業中に道徳副読本を持ち帰る感想を募るなど、親子で身近な人権課題について考える場を設定することができた。 ③小学校の教師が中学校で道徳を教えるなどより授業実践が進んだ。	A	○道徳授業において、その振り返りの際に自己の振り返りや自分の言動を見直す機会を設けるとともに、生徒にどのような変容があったのかを、通信等に掲載し保護者に周知する。 ○他を認めその存在を大切に思えることは本校生徒の最も誇れる点である。今後もその指導を継続していく。
特別支援教育	①コーディネーターを中心に、生徒の特性や背景を踏まえた組織的指導の充実及び教職員の研修 ②校区小学校、学級等との交流をととした学びの充実	①特別支援学級各担任と指導補助員とが連携した支援を継続中である。また、個に応じた支援の充実のため、学校生活支援教員とも情報共有を密にしている。 ②小学生を招いての交流会を行い、事前準備から会の司会進行など、中学生がよくリードをし先輩としての自覚の醸成を図った。	B	○交流学級生との交流の場面を増やししながら、将来の自立に向けた取組を継続する。 ○生徒・保護者の願いを受け止め、SC・SSW・学校生活支援教員による、より専門的な立場の見立てを加味した短期的な支援計画を全職員での共有し日々の支援に取り組む。
家庭・地域(校区小学校)との連携	①小中交流行事をはじめとした、学校からの積極的な情報発信 ②小中一貫教育を見据えた校区小学校との交流実践(教員・児童生徒)	①学校HPや学校だよりを通して、教育活動の情報発信を行っている。学校評価83.5% ②小中一貫教育推進実践校として、4回の合同研修会や児童生徒の様々な交流を行ってきた。教員同士についても9年間を見通したカリキュラム作りに取り組む中で、児童生徒の学習課題の共有や授業交流等を行い実践を積み上げてきた。また、学校運営協議会発信の「コミュニティ・スクール通信」を今年度発行してもらった。	A	○学校HP、特に学年のページの充実を図り、日常の教育活動の様子を広く発信する。すぐるの有効活用を検討する。 ○総合的な学習の時間の充実のため、小学校と連携することに加え、学校運営協議会を通して地域人材の活用を推進する。 ○小中一貫教育の推進とその周知のため、児童生徒の交流活動をより活性化させ、生徒から家庭への情報発信につなげる。
教職員の育成	①自主的な授業実践研修会による指導力の向上 ②勤務時間の適正化を図りワークライフバランスのとれた教職員の育成	①SCIによるカウンセリング研修、全生徒へのカウンセリング・アンケートを実施し生徒理解に努めるとともに、生指委員会や職員会議にて情報の共有を図り同一歩調での指導に努めた。 ②平日1回、土日いずれか1回のノー部活デーの完全実施(学校だよりにも定時退勤日を記載)により勤務時間の適正化に努めている。	B	○学力育成三木モデルの推進をねらいとした授業研究や研修の機会を設定する。また、授業における生徒のICT活用実践を積み上げる。 ○部員数をはじめとした状況を他校と共有しながら、将来的な部活動の地域移行を見据えた取組を進める。 ○土日が大会等となった場合の平日の部活動休養日を確実に設けるなど、引き続き職員の勤務時間の適正化に努める

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

自己評価の方法はおおむね適切である。 ・教職員・保護者・生徒という三者の立場からのアンケート結果をもとに、全職員で段階を踏んでいて考察されているため、評価が数値だけのものではなく、実態に即した評価となっている。 ・アンケート項目を三者同じ質問とすることで、より質の高い評価ができるのではないかと。 ・コロナウイルス感染症が5類に移行され、制約があった行事等が計画通りに実施されてたことは評価できる。今後、オープンスクール等、広く学校を公開する機会、教職員と保護者がコミュニケーションをとる機会を増やし、その更なる連携に努めてもらいたい。 ・小中一貫教育を中心に据え、小中の交流活動が活発に行われていたことは評価できる。また、今年度より、学校運営協議会が小中合同で開催されるなど、幅広く保護者や地域の意見を取り入れ教育活動に生かされていた。今後さらに発展していくことを期待する。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
B評価は適切である。 ・オープンスクール(授業公開)の様子を見ると、生徒が落ち着いて前向きに集中して学習している様子がうかがえた。今後、生徒の活発な意見交換があるなど、生徒が主体となる学習活動が展開される授業の更なる構築に努めてもらいたい。 ・三木市が取り組みを進めている「個別最適な学び」を実践する意味でも、AIドリルを授業の中で取り入れ、繰り返し基礎を学習することを推進していただきたい。
A評価は適切である。 ・校則の見直しを生徒会で取り組まみ、時代の変化に合わせ子どもたちが考え、変えるべきところは変えていく取り組みを進めていってほしい。 ・不登校対策については、学校にきにくい児童に関して、小学校と絶えず情報交換をしながら進めてほしい。また、保護者や生徒の内面に寄り沿った指導を継続していったもらいたい。
B評価は妥当である。 ・ICTの活用能力や授業における効果的な使い方等、教職員の資質向上の取組を更に進めてほしい。 ・小中一貫教育を推し進めて行くうえで、合同運動会が検討されていることは、大いに評価できる。また、今後は合同文化祭についても考えていっていただきたい。
A評価は妥当である。 ・道徳のスキルアップを目指して、多くの教師が道徳授業に携わり、研修を深めていっていることは評価できる。また、今後も道徳授業を通して生徒の変容をとらえながら、道徳的判断力や実践力の向上を目指した取り組みを進めていっていただきたい。 ・人権同和学習において小中で連携した取り組みを進めてもらいたい。
B評価は妥当である。 ・現在なされている教員と指導補助員、また、生活支援教員との連携を強固なものにしながら、生徒の将来的な自立に向けた取り組みが組織的に行われることを期待する。また、SC,SSWとも連携しながら進めてほしい。 ・今後も要支援生徒が増えていくことが考えられるので、関係機関とも連携を密にしながら一人一人の生徒のニーズにあった教育活動を進めていただきたい。
A評価は妥当である。 ・学校HPの充実が図られていることにより、学校における教育活動の実態や学習内容の情報発信が家庭に限らず「地域に開かれた学校」を目指した取り組みとして評価できる。 ・学校通信だけでなく、学級通信を発行しているクラスが多くあり、学校通信だけでは紹介できない学級の様子がよくわかるので、今後も継続して発行していただきたい。
B評価は適切である。 ・教職員の仕事量の増加及び多様化する職務の中で、ワークライフバランスに配慮しながら、心身の健康を保持するために勤務時間の適正化を更に図っていただきたい。 ・部員数減少の中で活動していく困難さに加え、将来的な部活動の地域移行に関して、市の部活動の在り方検討会議の議論だけでなく、学校においても今後の活動に関して検討を進めていってほしい。

